

◎ 連合会だより

8月22日、連合会の常任理事会を行い、その日の夕刻より、前理事長の内田さんをはじめ、第16回総会にて退任をされた6人の理事の方々への感謝の夕べをひらいた。

6人の方々のあいさつは、中西さんの「死ぬまで働く」という、あいさつの言葉にも触発されてか、それぞれの来し方のすごさを感じさせるものだった。学徒動員、戦争での捕虜などの体験をし、戦後の大動乱期に、全日自労に身を投じ、労働組合から事業団を産み、労働者協同組合をつくり、そして高齢者協同組合に挑戦している姿は、ひとつの歴史といえる。

わたしは、閉会のあいさつの中で、諸先輩のつくってきた労働者協同組合で働いていることに心から感謝していると伝えた。

人の歴史とともに、事業団も歴史を重ね、北九

州遠賀中間の事業団と長野の事業団が、ともに15周年を迎え、7月、8月に記念行事をひらいた。北九州の事業団は、九州全体が事業団運動ではなかなか花開かない中、一時の困難な時期を乗り越え、農協との提携などをはじめ、地域に根ざした特色のある仕事をしている。長野は、自治体からの仕事はひとつもない数少ない事業団の一つで、全国の方針とも心をひとつにして頑張っている。歴史のあるところは、それぞれに芯がある。

無茶々園とは、本格的な提携が今年度からはじまる。無茶々園につづいて、蔵王で酪農を営んでいるピガファームが連合会に加盟しようとしている。北九州では、農協から広い土地の活用の提案の依頼がきている。農業労働者協同組合の具体化がはじまる。やります、がんばりますがまたふえた。 鍛谷 宗孝（労働連合会・専務理事）

◎ センター事業団だより

厳しい猛暑が続く中、はや9月に入ってしまった。6-8月自治体集中行動は、自分の行動を振り返っても、「あまり自治体に行かなかった」思いと、一方で忙しく奔走した感がある。全国で「仕事おこし」と「協同」の挑戦をはじめの人々と実際に多く出会ったからだろう。居酒屋や森林組合、酪農家や高齢者の組織など、改めて協同の可能性を大いに感じた。この中から、連合会加盟やセンターへの加入が続く事で、我々の普遍性が、自他共に問われる段階と言う事か。一方で、組合員の意欲の高まり・成長をこの大きな流れの中でどう進めて行くのか。おそらく最も重く基盤となるテーマへの挑戦がいよいよ求められている事を実感する。具体的な「地域づくり」「仕事おこし」の絵図の明示が出発点だ。

3年次・1年次事務局員の研修会が開かれ、9月には2年次の研修が行われる。ここ2年来付き合ってきたが、「事務局員」の存在意義と「労協」の可能性が次第に固まるものとなってきた。ふと自分の若かりし頃？も思い浮かべつつ、共に学ぶ

場として逆に励みにもなる。毎年の研修で理想と現実のギャップが絶えず悩みとして出されるが、今年は、これを乗り越えるための議論に発展してきている。「働く場の確保」から始まった事業団が、本当の意味で協同の組織となっていくのは、職種やスタートの組織の目的と共に、共通の問題意識・矛盾をどこに置くのか、という点を鮮明にしていく事なのだと思痛感する。たぶん価値観や文化にふれるものだと思うが、「若造」事務局員に求められるのは、文字どおり「若さ」の伸びやかさと、真摯な自分自身の人間形成・発達を目指す学習であろう。

この間の焦点はいずれも高齢者協同組合につながる価値観を形成している。土台にある「人間らしさ」を具体的に一つ一つ解明していく事、営みに高めていく事が、当面の勝負となるようだ。旺盛に打って出る中で、組織を鍛え、事業を高め、秋の陣へ進もう。

古村 伸宏（労協センター事業団・事務局長）